

思 い 出

山形県 佐藤 於富

昭和十六年四月開拓団として夫と渡満、浜江省珠江県宏峰東村に入団、建築の仕事をした。人手が足りないほどの忙しさを朝早くから頑張った。十九年に召集され、終戦になった。

私は乳飲み子を抱いてハルピンの収容所生活になり、その後病院で看護婦として働いた。二十八年に上海から引揚船に乗船、二十三日舞鶴に着き、二十四日上陸、主人の家に引き揚げたが、主人の生死は判明せず、心細く不安な日々を送った。農業の手伝いをしながら夫の帰りを待ったが、帰国しなかった。引き揚げの話を知り、ラジオの尋ね人を毎日かかさず聞いたり、今か今かと不安は増すばかりだった。三十二年余目の個人病院で看護婦として勤め三十八年から山戸村の診療所に、四十年まで勤めた。同じ年現在地に自営の雑貨商を始めた。

夫の生死は今も判らず、終戦の日を命日とし、収容所で他界した二人の子供と共に供養している。昭和十六年から、二十八年に引き揚げるまでの十三年間を顧みて、感慨無量である。

昭和十六年から二十年八月までの五年間は日満両国の国旗がひるがえる開拓部落は日満両民族融合一体となつた平和郷そのものの生活で楽しい思いをしていた。

しかし、終戦前一年の十九年に主人が召集され、出発に当たって、私は、「二人の子供は立派に育てますから安心してください。あなたこそ軍人として手柄を立てて帰ってください」と励ましとつかないことを言って送り出した。

翌年の二十年八月終戦となり地方民の暴動、ソ連軍の侵入、もう満州の平和の開拓地は一変して、泥棒、殺戮などこの世とは思えぬ地獄とはこんなものだろうと思われた。

私の最も悲しいことは、二人の幼い子供を抱えての収容所生活だった。食べる物もない、高粱や粟の粥を食べたり、それもないときは大豆粕など何でも食べたが、私

が栄養失調になって乳もでなくなり、赤ん坊は火のついたように泣いていた。泣く力のあるうちは良いが、泣けなくなり、収容所では伝染病で毎日死んでいく、そうした中で、二人とも次々とロウソクの火が消えるように息を引き取った。私は主人に言った言葉を思い出しながら、悲憤の涙がとめどなく溢れ、子供と一緒に死のうかと思つたものである。

しかし私は、嫁いだ主人の生家に帰り、主人の出征のことを報告しなければならない。大切な主人の子供を亡くした、この仏様を主人の家に持ち帰って仏壇に収めなければならぬ。

しかし、戦争で負けた日本人に自由はなかった。ハルビンから次々と移動にあい二十八年上海から引き揚げ、故国日本に着いて主人の生家の皆さんに、主人の復員していない悲しみを忘れて、二人の子供を泣くしたお詫びを申し上げて泣いたことを思い出すと、今もとめどなく涙が流れる。

夫、長男、次女、無念の死

東京都 横須賀 房子

私は満州通化省柳河県で終戦を迎えた。四十五年前の八月十五日、重大放送があるから聞くようにと布令がまわったが、わが家のラジオは、ピーピーガーガー、音があるばかりで、何一つ聞こえなかった。

その日から私たちの戦争は始まったのである。いつ何が起るかも知れない、とにかく、いつでも出かけられるように、家の中の整理をはじめた。

牡丹江や新京方面から毎日ぞくぞく邦人が避難してくるようになり、九月にはいって、本人が散らばっていは連絡がとれないということで、九月八日、東関と南関に集結することになった。いざというときに着て行くものやたいせつなものは物盗りがきても安心だからと倉庫の中に入れて釘で打ちつけた。狭いながらも希望をもって床に入ったのもつかの間、東関に行った人達が暴民に